

魂の宿った風景 : コッツウォルズにみるイギリスの自然保護と観光政策

著者	高橋 義人, 大木 沙知子
著者所属(日)	平安女学院大学国際観光学部 平安女学院大学国際観光学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	14
ページ	61-71
発行年	2014-06-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001314/

魂の宿った風景

— コッツウォルズにみるイギリスの自然保護と観光政策 —

高橋 義人・大木 沙知子

I 自然と人間の共生

イギリス通の作家として知られる林望はイギリスの風景について、「まったく無名の普通の土地、そこにこそイギリスの風景の魂は宿っている。(中略) 何でもない風景を見る目が、またその風景を美しく作ってきた¹⁾」と記している。スイス・アルプスやイタリアのカプリ島やノルウェーのフィヨルドははっと息をのむような素晴らしい眺望で知られる。それに対してイギリスの田園風景にはシャッター・チャンスの特典な対象になるようなものはなく、電車やバスに乗っていて景色に見とれる人も少ない。そんな「まったく無名の普通の土地」ではあるが、そこにはアルプスやカプリ島やフィヨルドとは別種の魅力があり、「そこにこそイギリスの風景の魂は宿っている」。そう林望は言うのである。

「魂の宿った風景」は、いつまで見ても飽きることがない。ヨーロッパで魂の宿っている代表的な風景と言えば、筆者には、イタリアのトスカーナ地方、「東のトスカーナ」と呼ばれるドイツ・チューリンゲン地方、そしてイギリスのコッツウォルズの三地域が思い浮かぶ。これら三者には、アルプスやカプリ島やフィヨルドのような峨々たる山並みも、青い海も、切り立った岸壁もない。あるのはゆるやかに起伏する牧草地ばかりである。しかしここには訪れる人をやさしく包みこんでくれるような土地の「魂」があり、ここを訪れた者の心を癒してくれる。ここは「魂のこもった風景」なのである。「魂のこもった風景」とは、後述する「田園詩」や「牧歌的風景」のことである。

ヨーロッパにおける「魂の宿った」三風景のうち、ここでは、筆者にとって馴染みの深いコッツウォルズを取り上げ、コッツウォルズの「魂の宿った風景」が、自然の地形によってたまたまできたものではなく、自然と人間が力を合わせてつくられたものであることを、イギリスの環境保護運動の歴史を踏まえながら詳らかにしたい。そしてそれは、人間の営為である「観光」のあり方を考える上でも、ひとつの示唆を与えてくれるであろう。

「自然と人間が力を合わせてつくられたもの」という点で、トスカーナ地方、チューリンゲン地方、コッツウォルズの三地域は、日本の「里山」とかなり近い関係にある。事実、ヨーロッパの学者のあいだでは、近年、日本の「SATOYAMA」に関心を持ち、里山に見られる「自然と人間の共生」を理想的なエコシステムと捉え、それをヨーロッパに移入しようとする人たちが出てきている²⁾。たしかに里山にも「魂」が宿っている。

里山が再評価されている理由のひとつには、「里山再評価」を声高に叫ばなければならないほど、日本では自然破壊が進み、「自然と人間の共生」が失われつつあることがある³⁾。そんな自然破壊の進みつつある日本とは反対に、ヨーロッパ諸国はかつての日本の「里山」に見られるような「自然と人間の共生」に熱心に取り組み、それを観光政策でも生かしている。その好例がコッツウォルズである。イギリスの産業革命の流れから取り残されたこの地方は、産業革命による自然破壊や街並み破壊を免れ、産業革命以前の美しい田園風景と平和な街並みを保持することができた。そして20世紀前半、産業革命の持つ負の側面が注目されるようになると、イギリス人たちは長いこと忘れ去られていたコッツウォルズの「魂の宿った風景」に眼をとめ、自然や古い街並みの保存に積極的に取り組むよ

うになった。その結果、コッツウォルズは「英国で最も美しい地区」と言われるようになるとともに、イギリスの「最も古い街並みコンテスト (“The oldest borough in England”）」で一再ならず受賞するにいたった。

そこで本論考は、イギリスの環境保護活動の歴史的背景を踏まえながら、コッツウォルズの自然保護（景観保護）と観光開発の関係、また自然を愛するイギリス人の国民性について考察し、それを日本における環境保護や観光政策の一助にしようとするものである。

Ⅱ もっともイギリスらしい田舎コッツウォルズ

コッツウォルズは、ロンドン中心部から西に約 150km 行ったところに広がる丘陵地帯で、イングランドのほぼ中央に位置する。コッツウォルズの語源は「羊のいる丘」を意味する言葉にあり、北は



図1 コッツウォルズとイギリス地図

[http://ameblo.jp/eiokuantiques/
image-10364328488-10275644970.html](http://ameblo.jp/eiokuantiques/image-10364328488-10275644970.html)
(2013年5月6日取得)

チッピング・カムデン (Chipping Campden)、—シェイクスピアのふるさととして知られるストラトフォード・アポン・エイボン (Stratford-upon-Avon) を含むこともある—から南はバース (Bath) まで、東はオックスフォード (Oxford) までの三角形のエリア内がコッツウォルズと呼ばれている。2014年1月現在、コッツウォルズの人口はおよそ85,000人で、イングランドのなかでも最も人口密度が低い地域のひとつとされているが、それでも非都市部としての人口増加率はイングランドで一番高い。

土地利用の構成は80%以上が農地、およそ9%が森林地区となっている。広さは約2,038kmと、東京都とほぼ同じくらいで、約145の村から成り立っている。地域の生業は農業と牧畜業であるが、世界中から年間約380万人もの観光客が訪れる有名な観光地でもあるため、観光関連の雇用が全体の15.7%に及ぶ。人気のある村では毎週末、地元産の野菜や手作りの品を売るファーマーズ・マーケットが開かれ、観光客はもちろんのこと、地元の人々のあいだでも人気を博している。

この一帯に点在する村々は、13世紀頃に羊毛産業の集散地として栄えたところが多く、現在でも集落を少しはずれると、緑の牧草地が続き、羊が放牧されている。家々の床から屋根の瓦にいたるまで、建材には地元で採れるはちみつ色の石灰岩 (Limestone) が使われており、18~19世紀とほとんど変わらない風景が残されている。牧草地にはいたるところに、天然石であるドライストーン (Dry stone) を使った石積みの壁 (Dry stone wall) が散在している。放牧の羊や牛を囲う目的として使用されているこれらの石壁のほとんどは、18~19世紀に作られたものである。セメントを使用せず、石のみで積み上げられている⁴⁾。コッツウォルズの石壁はとて有名で、コッツウォルズの風景と石壁は景観の形成にとって切っても切れない関係にある。

コッツウォルズの田園風景は歴史的に見ても重要で、イギリスの環境維持活動の対象にもなっている。この地方の歴史は長く、4,000年以上も前の史跡が今でも数多く残されている。ここは古代ローマ帝国の影響を強く受けた土地でもある。紀元前1世紀から紀元5世紀までブリテン島は古代ローマの支配下にあった。ブリテン島はもともとケルト民族の住んでいる地であったが、そのケルト民族征

服のため、紀元45年、ローマ軍がこの地に侵入した。そして防衛に適した緩やかなこの地に着目し、軍隊用の道路や駐屯地を設けた。それが現在では高速道路や国道に変貌し、この地に欠かせない主要幹線道路となっている。さらに古代ローマの荘園（Roman villa）など、当時の高級軍人向けの建物も現存している⁵⁾。



図2 コッツウォルズ地図

<http://landsendtravel.web.fc2.com/uk/cotswolds/map.htm> (2013年5月21日取得)

13～15世紀、コッツウォルズ産の羊（Cotswold lion）はその羊毛と最高品質のウール製品によってヨーロッパ全域にその名を知られていた。これらのウールは高値で売り買いされ、羊毛産業で富を築いた農民たちは豪華なマナー・ハウス、カントリー・ハウス、教会を建築した。教会は「ウール教会（Wool Church）」として今でも地元の人々に親しまれている⁶⁾。また牧草地で草を食む羊の姿は、すでに長いこと「コッツウォルズのイメージ」として定着しており、コッツウォルズは、多くのイギリス人の憧れる、最も平和で最もイギリスらしい田舎であるともいわれている。

この地方に「魂の宿った風景」があると感じられるのは、ゆるやかに起伏する牧草地と、そこで草を食む羊の群れによるところが大きい。牧草地や羊は人間によって導入されたものである以上、この風景はたしかに人為的につくられた風景である。しかしヨーロッパの人々は昔からこのような風景を「田園詩」や「牧歌的風景」（bucolic）として愛で、それを詩や絵画や音楽に表現してきた⁷⁾。タツの戯曲『アミンタ』、クロード・ロランの風景画、ベートーヴェンの交響曲第六番「田園」は、ヨーロッパにおける田園詩の代表例である。田園詩とはまさしく「魂の宿った風景」のことなのだ。田園詩のなかにも数多くのジャンルがあるが、そのなかでも特に好まれたのは牧人小説（shepherd novel）だった。牧人、すなわち羊飼いが羊たちと仲良く暮らす生活を見て、ヨーロッパの人々は「失われた楽園」が甦るのを感じた。というのも、かつてエデンの園でアダムとエヴァが動物たちと仲睦まじく生活していたとき、そこには「自然と人間の共生」の原風景があったと信じられていたからである。そしてコッツウォルズは、そうした田園詩を現実に目の当たりにできる特別な場所だった。

ところで、ヨーロッパ人の理想である「田園詩」が夢物語ではなく、コッツウォルズにおいて現実に可能になったのは、皮肉なことに産業革命のおかげだった。



図3 コッツウォルズの石垣
(写真撮影 大木沙知子)

18世紀以降、イギリスで産業革命が始まると同時に、コッツウォルズは急速に時代の流れから取り残されていった。人々の好みが毛織物から綿製品へ、そして大量生産によって安価になった化学繊維へと移り変わっていったからである。コッツウォルズが「昔のままの姿」を保っているのは、じつはこの時期、時代の流れに乗り遅れたがゆえだった。今となってみると、逆にそれが功を奏した。産業革命後、イギリスに張り巡らされた鉄道網から取り残されたコッツウォルズには、産業革命前の「田園詩」がそのまま保たれた。そのためコッツウォルズは、産業革命に対して批判的な人々にとっての聖地

となった。その代表が、19世紀末から20世紀初頭にかけて、産業革命による大量生産を嫌ったアーツ・アンド・クラフツ運動 (Arts and Crafts Movement) の芸術家たちだった。彼らがこの地に移り住み、手作業による中世の創作活動を推進し、発信しつづけたことによって、コッツウォルズは文化的・社会的にも重要な意味をもつようになった。

イギリスの自然保護運動といえばナショナル・トラスト (National Trust) が有名だが、その歴史は長い。ナショナル・トラストは、1884年にオクタヴィア・ヒル (Octavia Hill 1838-1912) がロンドン近郊の17世紀の庭園を保全しようと考えたことに始まり、1895年にオクタヴィア・ヒル、ロバート・ハンター (Robert Hunter 1844-1913)、ハードウィック・ローンズリー (Hardwicke Rawnsley 1851-1920) の三人によって設立された。ナショナル・トラストは日本では「自然保護団体」であるかのように考えられていることが多いが、実際には「地域保全」「歴史保全」「伝統的環境の保全」「自然保護」という、イギリス人の「自然観」を反映した多面的な保全活動を行う団体である。世界中に約370万人 (2014年) の会員を抱えるナショナル・トラストは、2014年現在、イングランド、ウェールズ、北アイルランド (Northern Ireland) に「724マイルの海岸線、250,000haのカントリーサイド、59の村、166の建物、19の城、47の産業遺跡、49の教会、35のパブと旅館」を所有し保全している。ピーター・ラビットの原作者であるビアトリクス・ポター (Beatrix Potter 1866-1943) は、自分の死後、絵本の印税で購入した湖水地方の土地をナショナル・トラストに託すという遺言を残している。イギリスの政治家・歴史家として名高いウィンストン・チャーチル (Winston Churchill 1874-1965) も、自分が住んでいた家をいつまでも残しておいてもらうべく、それをナショナル・トラストに寄贈した⁸⁾。

1907年にはナショナル・トラスト法が制定された。この法令では、保存の対象となる資産は第三者に譲渡できず、抵当に入れることもできない。国会での特別の合意がないかぎり、公共事業開発での強制収用もできなければ、戦争に使用することもできない。この「譲渡不可能」の原則は、ナショナル・トラスト運動の大きな支えとなっている⁹⁾。

ナショナル・トラストは2014年現在370万人を超える会員を抱え、一分間に一人の割合で会員が増えつづけている。年齢、個人、家族等で会員は種別されており、ナショナル・トラストのホームページ (<http://www.nationaltrust.org.uk/membership/>) を見ると、生涯会員になることもできるらしい。わが子の誕生記念に「生涯会員証」を贈る家庭もあり、自分の生誕と同時にナショナル・トラストとの関わりが始まる国民も少なくない。そうしたことが功を奏して、現在、英国のナショナル・トラストは世界最多の会員数を誇っている。コッツウォルズのいくつかの村も、今日ナショナル・ト

ラストによって管理されている。

ナショナル・トラスト以外にも、英国最大の自然保護団体、「英国信託保護ボランティア (British Trust for Conservation Volunteers)」(略称BTCV)がある。イギリス政府環境庁の希望によって1970年に特別に制定されたもので、1959年に誕生した「自然保護組合」がその前身である。BTCVは世界各国からボランティアを募集しており、毎年200～250ものプロジェクトを組み、すでに破壊された自然の回復を進めている。

コッツウォルズが特別自然美観地域 (Area of Outstanding Natural Beauty) として指定された第一の理由は、その自然景観の美しさを今後も保存・改良していくことにあるが、第二の理由は、このカントリーサイドの素晴らしさをできるだけ多くの人々に知ってもらい、地域住民やそこで働く人々の利益を尊重することにある。後者は観光学にとっても看過できない重要なポイントである。

コッツウォルズは現在何百人ものボランティアによって支えられている。2004年には、コッツウォルズの環境保護をさらに推進するために、「コッツウォルズ環境保護局」が政府によって設立された。コッツウォルズの環境保護のため、政府の管理下から誕生したプロ組織である。コッツウォルズの特別美観地域を保全するための唯一の機構である保護局は、多種多様な計画を率先して実行している。具体的な活動には、①保全活動のための資金確保、②公共交通機関のブックレット発行、③伝統的技術や作業の調査やその復活に努める地元住民への支援、④持続可能な地元農業の支援、⑤年二回の機関誌の発行、⑥ドラストーンによる塀作りやヘッジレイアウトの協議会、⑥コッツウォルズのボランティア監視員の仕事の支援等がある¹⁰⁾。そして2006年には「フレンズ・オブ・ザ・コッツウォルズ (Friends of the Cotswolds)」という慈善団体が設立された。この団体は、コッツウォルズ特別自然美観地域の環境や風景の保護および改善を支援するための組織で、これは、コッツウォルズが、「ここに住む人」にとっても、「ここで仕事をする人」にとっても、そして「ここを観光で訪れる人」にとっても特別にすばらしい場所になるように、つまり「魂の宿った」場所になるように努めるものである。そのみか、フレンズ・オブ・ザ・コッツウォルズは、風景の保全や地元の地域社会のためになるプロジェクトを行うさまざまなグループや組織に助成金を交付している。そしてこの活動を支えるための資金は全面的に寄付に依拠しており、政府からの一定の独立性を保っている。

このようにイギリスでは、多くの団体や人々によって積極的に環境保護活動が進められている。こうした彼らの活動の根柢に、「魂の宿った風景」に対する彼らの深い愛情があることは疑いえない。

イギリスをはじめ、ヨーロッパの人々は日本人よりも強い公共精神をもっている。民間団体であるナショナル・トラストが英国で最大の会員数を誇っていることは、その証拠のひとつである。「National Trust」の「National」は、「国家の」よりも「国民の」という意味である。イギリス人はナショナル・トラストの会員になることで「自分も美しい景観や建造物を守っている」という誇りを得ることができる。イギリスで多くの環境保護活動が進められている理由のひとつには、明らかにイギリス人の強い公共精神と「魂の宿った」自然への愛がある。日本は経済発展を目指すばかりではなく、こうした点をも英国から学ばなければなるまい。そうしなければ、日本の自然はさらに彼らに破壊されていくばかりであろう。

Ⅲ 産業革命とナショナル・トラスト

イギリスの産業革命は18世紀後半に始まった。これは世界で最も早い産業革命であった。約70年間続いた産業革命によって、農業中心国であったイギリスは工業中心国に変わった。機械制大工場が増え、仕事を求める人々が農村から都市へと流れ込んでいった。

産業革命によってイギリスは、植民地を含む国土の大きさにおいてのみならず、経済的に見ても世界一の大国へと成長することができたが、しかし産業革命は自然をいわば大量に「搾取」するもので

あり、それによってイギリスが失ったものは計り知れないほど大きかった。

産業革命が惹き起こした環境破壊は凄まじいものであった。イギリスの小説家ピーコック (Thomas Love Peacock, 1785-1866) の小説 “Gryll Grange” (グリル農園) には、当時のイギリスの環境悪化がどのようなものであったか、鮮明に記されている。

“Between them they have poisoned the Thames, and killed the fish in the river. A little further development of the same wisdom and science will complete the poisoning of the air, and kill the dwellers on the banks.¹¹⁾” ([知恵と科学が] 手を取り合って、テムズ河を汚し、魚を殺してしまった。この知恵と科学がもう少し発展すれば、ついには空気も汚染し、沿岸地域の人々を殺してしまうだろう。)

これは 1858 年に書かれたもので、この小説を読めば、その頃からすでに深刻な環境汚染が始まっていたことがよく分かる。

“Look at the subsoil of London, whenever it is turned up to the air, converted by gas leakage into one mass of pestilent blackness, in which no vegetation can flourish, and above which, with the rapid growth of the ever-growing nuisance, no living thing will breathe with impunity. Look at our scientific machinery, which has destroyed domestic manufacture, which has substituted rottenness for strength in the thing made, and physical degradation in crowded towns for healthy and comfortable country life in the makers.¹²⁾” (ロンドンの下層土が地表に表れているところを見てほしい。しみ込んだガスが空気に表れ、真っ黒な塊ができています。ここに植物は育たない。そして上空も、ますます増大する厄災の急速な上昇のために、生き物たちが安心して呼吸することができなくなっている。家内労働を駆逐してしまったわが国の科学的機械を見てほしい。製品の堅固さを腐敗と取り換えてしまったのではないか。田舎の健康で快適な生活の代わりに、人の溢れる都会の墮落を得たのではないか。)

この小説に描かれた以上の描写から、当時のイギリス、特にロンドンの環境汚染がいかに悲惨なものであったかを知ることができる。そしてこのような劣悪な環境のなかで、イギリス人が昔から抱いていた緑なす田園詩への憧れはますます強まっていった。

日本にもかつて公害問題があったが、当時のロンドンの環境破壊はそれ以上だった。ロンドンを流れるテムズ川が大気汚染によって汚され、たくさんの魚が死んで水面に浮かんでいた。テムズ川があまりにもむごい悪臭を放つため、テムズ河畔にあるウェストミンスター宮殿 (国会議事堂) での議会が中止となることも再三あった。

このようにロンドンでは産業革命によって経済的に潤うと同時に大きな環境汚染を受けたが、ではロンドンから 200 キロ離れたコッツウォルズはどうだったのであろうか。

コッツウォルズはかつて羊毛産業で栄えていたが、前述したインド綿の大流行のため、羊毛産業は衰退していった。生産に関しても、コッツウォルズで行われていたような家内制手工業では効率が悪いため、イギリスでは大型機械を導入した工場制機械産業が主流となった。そのため羊毛生産の中心は、品質を重視して大量生産をしなかったコッツウォルズからヨークシャー地方 (Yorkshire) へと移っていった。14~15 世紀にかけて世界最良と言われていたコッツウォルズ産羊毛は、こうして産業革命という時代の波のなかで次第に忘れ去られていった。この頃イギリス中に鉄道が張りめぐらされるようになったのも産業革命の賜物であったが、石炭が産出されなかったコッツウォルズには鉄道

が通らず、町は開発されないまま工業化の波から取り残されていった。当時のヨーロッパでは運河が物資を運搬する役を担っていた。コッツウォルズを取り囲む三角形のエリア、オックスフォード、ストラトフォード・アポン・エイボン、バースには運河や川が流れていたものの、その内側にあるコッツウォルズの小さな村々には運河も川もなかった。

しかしこのようなことが逆に幸いして、コッツウォルズは今日にいたるまで産業革命後の環境悪化を逃れ、中世の美しい自然と古い街並みそのまま取り残されることとなった。それによってこの地方はイギリス人にとって「魂の宿った」特別な場所となった。イギリスの環境史は世界的に有名であるが、この壮絶な歴史的背景があったからこそ、今日見られる自然愛の強いイギリス的国民性が確立されたことを忘れてはならない。

Ⅳ イギリスの観光政策と日本の観光政策

2012年の夏、コッツウォルズを実際に訪れ、自分の目で「魂の宿った風景」を体験し確かめることができた。

当地に行くまで、すでにならかなり調査を進めていた筆者は、コッツウォルズはこんなに人気があるのだから、観光地として賑わい、人混みでごった返しているにちがいないと憶測していた。しかし実際に訪れてみると、観光地であることを忘れてしまいそうなほど静かな村が多かった。これが、筆者が現地を訪れて最も注目した点である。「観光客」としての筆者の現地訪問は、コッツウォルズがいかにも「観光地らしくない観光地」であるかということを知る旅となった。

筆者がバスで訪れたのは、バーフォード (Barford)、バイブリー (Bibury)、ボートン・オン・ザ・ウォーター (Borton On The Water)、ブロードウェイ (Broad Way) の主要観光地4か所だった。



図4 美しいコッツウォルズの家々

(写真撮影 大木沙知子)

バスに乗り、ロンドンから少し離れると、イギリスの美しい田園風景が見えてくる。ロンドンの近代的な建物や同じような家々が立ち並ぶ風景が一変し、青々としたなだらかな丘がどこまでも続いている。周囲には建物すらなく、たまに農家の一軒家がぼつんと見える程度だ。丘には木々が点々と茂り、遠くで羊や牛や馬がのんびりと草を食み、木陰で一休みをしている姿が見え、まことにのんびりとした平和な風景が広がっている。まさしく「田園詩」のなかにいるかのようなようだった。そんな風景が続いているさまを眺めていると、自分自身がこの美しい風景のなかに包まれているかのように感じられ、と

とても穏やかな、なぜかなつかしい気持ちになった。昔から「田園詩」に憧れてきたイギリス人にとって、近代的なロンドンの風景より、田舎の風景の方に親しみが感じられるのは不思議なことではないが、もともと農民として暮らしてきた私たち日本人にとっても、緑あふれる田舎の風景にはいかにも親しみが感じられた。たしかにここには「魂」が宿っていた。

コッツウォルズの村々をまわってみて、驚いたことがあった。それは、イギリス人にとっては当たり前のことなのかもしれないが、今から300年以上も前に建てられた家々に現在でも人が住んでおり、昔と変わらず自然とともに生活をしているということだった。

コッツウォルズにある家々はおよそ14～17世紀ごろに建てられたもので、とても古い。しかし昔と変わらないまま、今でも同じ場所、同じ家に人が住んでいる。筆者が実際に訪れたバイブリー

(Bibury) という村には、14 世紀に建てられた石造りのコテージが列をなして並んでいた。このコテージはアーリントン・ロウ (Arlington Row) と呼ばれ、有名な観光スポットになっている。日本の家々や街の風景とはまったく違い、ハチミツ色と呼ばれるくすんだ黄色の、落ち着いた色合いをした小さな家々を豊かな緑がやさしく包みこんでいた。きちんと手入れのしてある庭には季節の花が咲き乱れ、つる科の植物が家を覆っていた。東京やロンドンには見られない人と緑との調和、田園詩、つまり「魂の宿った風景」がそこにはあった。バイブリーは詩人 W・モリス (William Morris 1834-1896) によって「英国で最も美しい村」と名づけられた。もともと羊小屋として建てられたアーリントン・ロウは、現在はナショナル・トラストによって管理され、一般人が住んでいる。このような建物に住もうとすれば、ナショナル・トラストの厳しい審査に通らねばならないようだ。

観光地なのに、そこに人が住んでいるという事実にも驚かされたが、もっと不思議なことは、アーリントン・ロウにあまり生活臭が感じられなかったことだ。イギリスでは庭は家の裏側にあるため、われわれに見えるのは表側だけだったので、もしかしたら裏側には洗濯物が干してあるのかもしれないが、とても人が住んでいるとは思えない静けさであった。小さな村だからか、村を歩いている人も少なく、アーリントン・ロウの近くにはマス養殖場とそれに付随した土産物屋が一軒、そしてホテルが一軒あるにすぎなかった。土産物屋も大変小さく、売っているものは地元でつくられたハチミツやジャム、クロテッドクリームなど、素朴なものばかりだった。それまで筆者は、ここまで世界的に有名な観光地である以上、そこには、大きな土産物屋やそれに関連する施設等がたくさんあり、人の群れでつねにごった返しているだろうとイメージしていた。ところが現実には正反対だった。不自然なまでに飾り立て、不自然なまでに人が多く、不自然なまでに騒々しい観光地が最近の日本には数多く見られるが、バイブリーはその正反対だった。観光化の勢いに吞まれず、そこに住む人々と緑の存在を尊重することによって、昔のままの姿を保っていたのである。

近年の日本の観光地には、商売に特化し、環境保護よりも経済性を優先しているところがじつに多い。筆者 (大木) の出身地である静岡県と山梨県との県境にそびえたつ富士山は、2013 年 6 月、世界文化遺産として登録され、世界中に認められた名所になった。今後、全世界からますます多くの観光客や登山者がやってくるだろう。富士山が世界文化遺産となり、地元は歓喜に溢れているが、観光客増加に伴い、富士山の自然破壊が進む可能性は残念ながらとても高い。

「世界遺産 近くで見れば ごみの山」¹³⁾と川柳にもうたわれている通り、美しいと思っていた富士山に登ってみて、ゴミの多さに失望させられた人は多いだろう。コッツウォルズと比べてみると、富士山が世界自然遺産に認定されなかったのは当然のことだったと首肯される。ゴミの散乱や登山道の破損、トイレの許容量オーバーなど、問題は山積しており、自然を守ろう、「魂の宿った風景」を守ろうという姿勢が日本には根本的に欠落していると感じずにはいられなかった。

富士山は日本人の心の故郷であり、富士の眺めは「魂の宿った風景」である。しかし観光客でごった返っていて、「魂」や「心の故郷」がはたして感じられるであろうか。

コッツウォルズを訪れて、筆者は日本の観光政策に強い疑問を感じた。富士山麓の地元住民は、なぜコッツウォルズのように自然保護・景観保護を優先しないのだろうか。富士山がせっかく世界文化遺産として登録されたにもかかわらず、地元の自治体は後世に富士山の美しさを残そうとするのではなく、むしろ商業的な目的にばかり目を向けているように思われる。静岡県に住んでいた筆者は幼い頃から富士周辺に遊びに行くことが多く、富士の自然と触れ合う機会が多かったので、富士の自然が破壊されると思うと心がとても痛む。コッツウォルズのように自然を守りたいという地域住民の強い気持ちや結束力がもしも日本にもっと根づいていれば、富士山の美しさをもっと守り、自然の破壊をもっと防ぐことができるであろう。そう思わずにはいられない。

コッツウォルズは「イギリス人の心の故郷」と言われるだけあって、ナショナル・トラストや保護

団体から手厚い保護を受け、地域住民を含む国民全体から後世に残すべき景観として大切にされている。そのため景観を汚そうとする人がいるはずもなく、観光客もこの美しい景観を守りたいと願っている。だからこそコッツウォルズを訪れる観光客はマナーを守り、自発的に募金をし、景観の保護に協力を惜しまないでいる。このように景観を守ろうとする国民全体の強い意志があるからこそ、政府も自然保護・景観保護に積極的になり、それゆえにコッツウォルズは今もなお美しい姿を保つことができている。富士山や京都には、このような国民の精神的サポートがない。日本がこれ以上「魂を失った観光地」を増やさぬようにする上で、コッツウォルズはまたとないよい見本となるのではなかろうか。

日本人がコッツウォルズから学ぶべきことは多々ある。もともとイギリス人は自然を愛でる国民であったが、産業革命以降、自然と共生することをやめ、文明的な生活を享受してきた。しかし、そのため長年にわたり環境破壊による公害に悩まされることになった。それまで自然と共生してきたイギリス人にとって、その事実は大変心苦しいものであったにちがいない。この負の歴史によってイギリス人は自然の重要性を痛感することとなり、そこで生まれた精神が今日まで受け継がれるようになった。そのようなイギリス人にとって、たまたま産業革命にともなう経済的發展から取り残されたコッツウォルズは、何ものにも替えられない貴重な精神的財産であり、「魂」の故郷である。他方、戦後、急速な成長を遂げ、経済を最優先させてきた日本人からすれば、文明的な生活を送るためには景観破壊もやむをえず、古都の都会化は進めるべきものなのである。コッツウォルズの村や田園風景の美しさに見入りながら、景観の価値は建物のデザインや高さ、かかった金額等で決まるものとはかぎらないと知った。どれだけ元のままの姿を保っているか、どれだけ多くの人々の思いがそこに込められ、その景観が守られているかどうかが大変なのである。大金をはたいて建てられたスカイツリー、私たちの先祖が昔から神の山と崇めてきた神聖な富士山、唯一目で見ることができるといわれるべき古都の景観、本当に守らなければならないものはいったいどれなのだろうか。今日、日本でもいたずらに自然を破壊してきた反省から自然保護・景観保護が進みつつあるが、イギリスと比べれば、その施策ははるかに貧しいと言わざるをえない。

可能なら、コッツウォルズに移り住みたい。かなりの数のイギリス人がそう思っている。それは観光地としてのコッツウォルズに対してではなく、魂の故郷としてのコッツウォルズに対してである。

コッツウォルズの現在の主産業は観光である。筆者が訪れたときも観光客が多く、大きな村はそれなりに賑わっていた。一方、観光業が成り立たない無名の村では、人々は学校、病院、郵便局、店舗等で働いている。こうして働いている人たちの他に、ここには老後を楽しみ過ごしている人たちがいた。「田舎で優雅に暮らす」というのがイギリス人にとっての憧れであり、理想的な老後の過ごし方なのである。

イギリス人のなかには老後、コッツウォルズのような郊外の田舎に住みたいと夢みている人たちが多数いる¹⁴⁾。なぜイギリスでは老後田舎に住みたいと思うのか。それは田舎が「田園詩」であり、ここには魂が宿っているからだ。

コッツウォルズの歴史や環境保護活動について調査を重ね、現地を訪れた結果、コッツウォルズは観光地だからといっても観光客に媚びず、地元住民も観光客とともに「魂の宿った風景」を大事に守ろうとしているということがよく分かった。世界的に有名な観光地であるにもかかわらず、この土地も地元民も田舎らしい素朴な姿を保っている。土産物屋、パブ、レストランにも、地元の人々が昔から経営してきたようなこじんまりしたところが多く、常連の地元民とパブのオーナーがそこでゆったりと楽しそうに世間話をしている。それでいて、観光客が入ってくると、彼らを温かく迎えてくれる。迎えられた方は、まるで自分も昔からこの土地に住んでいるのではないかと感じさせられるような心持ちになる。ロンドンで忙しく働いている人々と比べると、まるで正反対である。きっとコッツ

ウォルズの自然が、そこに住む人々の心を穏やかにし温かくするのであろう。そういうことがあるため、コッツウォルズを訪れた誰もが「いつかここに住みたい」と思うのにちがいない。人々の温かさに触れると、なぜかなつかしさが感じられ、心が癒される。そんな人間的な魅力がコッツウォルズにはたっぷりある。自然を愛でる国民性、産業革命以降の環境破壊のトラウマ、古いものに価値を見だしそれを受け継いでいこうとするイギリス人の心性、これらが合わさった結果、今日ナショナル・トラストを始めとする自然保護団体が大いに活躍することができ、幾多の自然や歴史的価値のある場所が守られているのである。われわれ日本人も、イギリス人のような価値観を見いだすことができれば、これから先の日本の風景も大分いい方向に変わっていくのではないだろうか。そう思わずにはいられなかった。

注

- 1) 林 望 (1993) 『イギリスの風景と心』(プラネットジァースマガジンス編『TABITO』創刊号、阪急阪神ビルマネジメント) 3-6 頁。
- 2) Cf. Anantha Kumar Duraiappah, Koji Nakamura, Kazuhiko Takeuchi, Masataka Watanabe (eds.): *Satoyama-Satoumi Ecosystems and Human Well-Being. Socio-Ecological Production Landscapes of Japan*. Tokyo, United Nations University Press, 2012, pp.518.
- 3) Cf. Anantha Kumar Duraiappah, Koji Nakamura, Kazuhiko Takeuchi, Masataka Watanabe (eds.): *Satoyama-Satoumi*. do. 森本幸裕『景観の生態史観』京都通信社、2012年、16-17頁、森本幸裕「みもろつく鹿背山再生プラン」木津川市報告書、2014年「信太山開発反対一万人」読売新聞、2011年8月23日参照。
- 4) 英国観光庁「The Cotswolds」<http://www.the-cotswolds.org/top/japanese/intro.php> (2013年5月6日取得)
- 5) 小野まり (2007) 『図説英国コッツウォルズ — 憧れのカントリーサイドのすべて』河出書房新社、8-9頁。
- 6) 英国観光庁「The Cotswolds」<http://www.the-cotswolds.org/top/japanese/intro.php> (2013年5月6日取得)
- 7) Vgl. Klaus Garber (Hg.): *Europäische Bukolik und Georgik*. Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1976, 538S.
- 8) 木下 卓、窪田憲子、久守和子 (2009) 『イギリスの文化 55 のキーワード』ミネルヴァ書房、246頁。
- 9) 木下 卓、窪田憲子、久守和子 (2009) 『イギリスの文化 55 のキーワード』前掲書、245頁。
- 10) 小野まり (2007) 『図説英国コッツウォルズ』前掲書、123-124頁。
- 11) Thomas Love Peacock (1861): *Gryll Grange*, Harmondsworth, Penguin Books, p.11.
- 12) Thomas Love Peacock (1861): *Gryll Grange*, do. p.128.
- 13) <http://info.elne.jp/senryu21/index.rsp?pn=3> (2014年5月21日取得)
- 14) Cf. <http://www.movetothecotswolds.com/> (2014年5月21日取得)

参考文献

- 1) 太田正美 (2009) 『美しいまちづくり』(東京図書出版会)
- 2) 岡田久仁子 (2007) 『環境と分権の森林管理 — イギリスの経験・日本の課題』(日本林業調査会)
- 3) 小野まり (2006) 『図説英国ナショナル・トラスト紀行』(河出書房新社)
- 4) 河野真太郎 (2013) 『〈田舎と都会〉の系譜学 — 20世紀イギリスと「文化」の地図』(ミネルヴァ書房)
- 5) 川比 稔、本畑洋一 (2000) 『イギリスの歴史帝国 — コモンウェルスのあゆみ』(有斐閣アルマ)
- 6) 木原啓吉 (1998) 『ナショナル・トラスト — 自然と歴史的環境を守る住民運動、ナショナル・トラストのすべて』(三省堂)
- 7) 小関由美 (2008) 『英国コッツウォルズをぶらりと歩く』(小学館)

- 8) 斎藤公江 (2005) 『モリスの愛した村 — イギリス・コッツウォルズ紀行』 (晶文社)
- 9) 竹田 泉 (2013) 『麻と綿が紡ぐイギリス産業革命 — アイルランド・リネン業と大西洋市場』 (ミネルヴァ書房)
- 10) 辻丸純一 (2002) 『英国で一番美しい村々コッツウォルズ (シヨトルトラベル)』 (小学館)
- 11) 日本環境教育フォーラム著 (2008) 『日本型環境教育の知恵 — 人・自然・社会をつなぎ直す』 (小学館クリエイティブ)
- 12) 饒村 曜 (2013) 『最新図解 PM2.5 と大気汚染がわかる本』 (オーム社)
- 13) 福土正博 (1995) 『イギリス農業と環境保護』 (日本経済評論社)
- 14) 水野祥子 (2006) 『イギリス帝国からみる環境史 — インド支配と森林保護』 (岩波書店)
- 15) 横川節子 (2003) 『ナショナル・トラストを歩く』 (千早書房)
- 16) 横川節子 (2001) 『イギリスのナショナル・トラストを旅する』 (千早書房)

(付記) 本論考は、2013年度の平女の最優秀論文賞に選ばれた大木沙知子氏の卒業論文に、指導教員であった高橋義人が大幅に手を加えたものである。文中の「筆者」はおおむね大木沙知子を指す。

Landscape That Owns a Soul : Nature Protection and Tourism Policies in England Cotswolds as an Example

TAKAHASHI, Yoshito · OKI, Sachiko

With respect to England, the well-known Japanese author Nozomu Hayashi once pointed out that here it was possible to feel the soul of England's landscape in a completely unknown country. This statement is especially valid regarding Cotswolds. However, its landscape with a soul has not been in existence since the very beginning. For about the last one hundred years, it has been taken care of, developed and has stayed under protection. This movement is mainly carried out by the National Trust or British Trust for Conservation Volunteers. Regarding Cotswolds, one can discern the best example for nature protection as well as coexistence of nature and people.

During the 19th century, Cotswolds was left behind by the wave of the so-called Industrial Revolution. This actually allowed the region to escape worrying environmental destruction. Around the end of the 19th century, English people were able to rediscover Cotswolds, the long-forgotten soul of a beautiful landscape.

Tourism also needs to contribute to the preservation of this beautiful landscape with its nature and villages. The construction of modern stores is not allowed and it is not permitted to damage to the landscape by littering. The will to preserve the old is very clear and this is — in our opinion — the big difference between English and Japanese tourism policies.